

臨床研修修了者アンケートを用いた美容外科進路希望の関連要因の検討

研究分担者 山本 祐 自治医科大学 地域医療学センター 総合診療部門 講師

研究要旨

【背景および目的】

本邦では、必修2年間の臨床研修直後に専門研修を経ずに自由診療の美容医療に進む、いわゆる「直美(ちよくび)」が注目されており、新規登録医師の約2.1%がこの経路を選択している。美容外科クリニック数も2020年から2023年にかけて43.6%増加し、若手医師の美容外科への流出が懸念されている。本邦では美容外科は日本専門医機構が定める19基本領域専門研修に含まれず、直美に加え専門研修修了後に美容外科へ移行する経路(専門研修後美容外科)も存在するが、両経路を区別して進路選択の規定因子を検討した研究は存在しない。

本研究は、美容外科を希望する者を2経路に区別し、各経路を選択する者の背景特性と関連要因を、美容外科以外を希望する者と比較して明らかにすることを目的とした。

【方法】

厚生労働省が2018年から2022年に実施した臨床研修修了者アンケートデータを用いた横断研究である。参加者をA群(直美)、B群(専門研修後美容外科)、C群(基準群、美容外科以外)に分類し、C群を基準とした多項ロジスティック回帰分析(多重代入法、 $m = 100$)を実施した。

【結果】

本解析対象30,529名のうち、美容外科希望者(A群+B群)は191名(0.63%)であった。A群およびB群はいずれも、給与動機(調整オッズ比[aOR] 21.15 および 17.22、いずれも $p < 0.001$)、学位取得希望の低さ(aOR 0.07 および 0.16、いずれも $p < 0.001$)、形成外科/美容外科ローテーション期間の長さ(週あたり aOR 1.16 および 1.18、いずれも $p < 0.001$)と関連した。地域枠採用は直美選択を強く抑制した(aOR 0.19、 $p = 0.02$)が、専門研修後美容選択には有意な影響を示さなかった(aOR 0.82、 $p = 0.65$)。

【結論】

臨床研修修了時点での美容外科希望は給与動機、学位取得希望の低さ、形成外科/美容外科ローテーション期間の長さに関連し、これらは直美と専門研修後美容で共通していた。一方、地域枠採用の効果は経路により異なっていた。

A. 背景および研究目的

医師の地域・診療科偏在は医療提供の公平性を脅かす課題であり、若手医師のキャリア選択に影響する要因の理解は、偏在対策を策定する上で不可欠である。本邦では、必修2年間の臨床研修直後に専門研修を経ずに自由診療の美容医療に進む、いわゆる「直美(ちよくび)」が注目されている。新規登録医師の約2.1%がこの経路を選択し、美容外科クリニックを主たる勤務先とする医師数は2022年時点で約1,200名と2008年比で約3倍に増加、その半数が20～30代である。美容外科クリニック数も2020年から2023年にかけて43.6%増加し全診療科で最高の増加率を示しており、若手医師の美容外科への流出が他診療科の人材確保を圧迫する懸念が高まっている。安全性の観点でも、不十分な訓練下での美容処置による重大な合併症が報告されており、厚生労働省は2024年に医師偏在対策パッケージにおいて自由診療への直接進出を間接的に抑制する方針を打ち出した。

形成外科・美容外科のキャリア選択に関する国際的研究では、医学部での当該領域への接触、ライフスタイル、収入と社会的地位、即時的な処置結果が主要規定因子として一貫して報告されている。しかし、本邦では美容外科は日本専門医機構が定める19基本領域専門研修に含まれず、医師は専門研修を経ずに美容外科に進む経路(直美)に加え、19基本領域いずれかの専門研修修了後に美容外科に移行する経路(専門研修後美容)も選択可能であり、両経路は制度的に異なる位置づけを持つ。

本邦における美容外科進路選択の規定因子に関する実証的エビデンスは乏しく、直美と専門研

修後美容を区別して個人レベルの要因を検討した研究は存在しない。本報告は、本邦の臨床研修修了者アンケートを用いた探索的解析により、美容外科を将来希望する者を直美および専門研修後美容の2経路に区別し、各経路を選択する者の背景特性と関連要因を、美容外科以外を希望する者と比較して明らかにし、政策議論に資する基礎データを提供することを目的とする。

B. 研究方法

本研究は、厚生労働省が2018年から2022年に実施した臨床研修修了者アンケートデータを研究利用申請により取得し、独自分析を実施した横断研究である。回答者のうち、25歳未満、総臨床研修期間79週未満(いずれも自己申告上の誤記と判断)、将来希望分野が不明、翌年度の専門研修ステータスが不明、専門研修を経ずに美容外科以外を希望する者を除外した。

アンケートでは、臨床研修修了時点で(1)将来従事を希望する分野、および(2)翌年度に進む専門研修領域(日本専門医機構が定める19基本領域からの選択。美容外科は19基本領域に含まれない)を別個に評価した。これらに基づき、参加者をアウトカムとして以下の3群に分類した:

- ・A 群(直美): 専門研修に進まず、臨床研修直後から美容外科診療を希望
- ・B 群(専門研修後美容外科): 19基本領域いずれかの専門研修後に美容外科診療を希望
- ・C 群(基準群): 19基本領域いずれかの専門研修後に美容外科以外の分野での診療を希望

B 群には形成外科を専門研修として選択した参加者(B-1)と、形成外科以外の専門研修を選択した参加者(B-2)が含まれるが、研究目的(美容外科診療への希望と関連する要因の同定)に基づき、両亜群を統合した単一の B 群として主解析を実施した。

3群間で性別、年齢、卒業大学種別、地域枠採用、臨床研修病院種別、医学博士号取得希望、形成外科/美容外科ローテーション期間、および将来希望分野の選択理由を比較した。連続変数は Kruskal-Wallis 検定、カテゴリ変数はカイ二乗検定(モンテカルロ法)を用い、選択理由 21 項目には Benjamini-Hochberg 法による FDR 制御($q < 0.05$)を適用した。効果量としてカテゴリ変数には Cramér's V を併記した。

多項ロジスティック回帰分析では、C 群を基準カテゴリとし、A 群 vs C 群、B 群 vs C 群の 2 対比を推定した。共変量は先行研究を参考に選定し、本邦特有の要因として地域枠採用を含めた。共変量の欠損は Little の MCAR 検定で MCAR と判定されたうえで、本解析では完全条件特定法による多重代入法($m = 100$)で処理し Rubin のルールに基づき統合した。感度分析として完全ケース分析を実施した。

補足解析として、B 群を構成する B-1 群と B-2 群を直接 2 群比較し、両亜群の基本属性および選択理由の差異を記述した。連続変数は Mann-Whitney U 検定、カテゴリ変数は Fisher 正確確率検定を用い、選択理由 21 項目には Benjamini-Hochberg 法による FDR 制御($q < 0.05$)を適用した。効果量として ϕ 係数を併記した。

統計解析には IBM SPSS Statistics version 25 (IBM Corp., Armonk, NY, USA)を用い、両側 $p <$

0.05 を統計的有意とした。

倫理面への配慮

自治医科大学医学系倫理審査委員会の承認を取得し、ヘルシンキ宣言の倫理原則に則り研究を実施し、STROBE 声明に準拠して報告した。

C. 研究結果

2018 年から 2022 年のアンケート回答者 35,097 名から除外基準該当者 4,568 名を除き、本解析対象は 30,529 名であった(図)。内訳は A 群(直美) 110 名、B 群(専門研修後美容外科) 81 名、C 群(専門研修後美容外科以外、基準) 30,338 名で、美容外科希望者(A 群+B 群)は合計 191 名(0.63%)であった。

基本属性および選択理由 (3 群比較)

3 群の基本属性を表 1 に示す。卒業大学種別で群間差を認め($p = 0.02$)、B 群の私立大学卒比率が 50.6%と A 群(38.2%)・C 群(36.8%)より高かった。地域枠採用者比率は美容外科希望群で低く(A 群 1.8%、B 群 7.4%、C 群 11.2%、 $p = 0.01$)、医学博士号取得希望も C 群 36.5%に対し A 群 3.6%、B 群 7.4%と著明に低かった($p < 0.001$)。形成外科/美容外科ローテーション期間は美容外科希望群で長かった(A 群・B 群中央値 4 週 vs C 群 0 週、 $p < 0.001$)。

将来従事希望分野の選択理由を表 2 に示す。「給与が良い」の選択率は A 群 52.7%、B 群 45.7%に対し C 群 4.4%で、本研究で検討した全項目中最大の効果量を示した($p < 0.001$ 、Cramér's V = 0.17)。「労働環境が良い」「独立・開

業しやすい」「適性・才能がある」も美容外科希望群で高く、「学問的興味」「優れた指導者」「専門性維持」はC群で高かった。

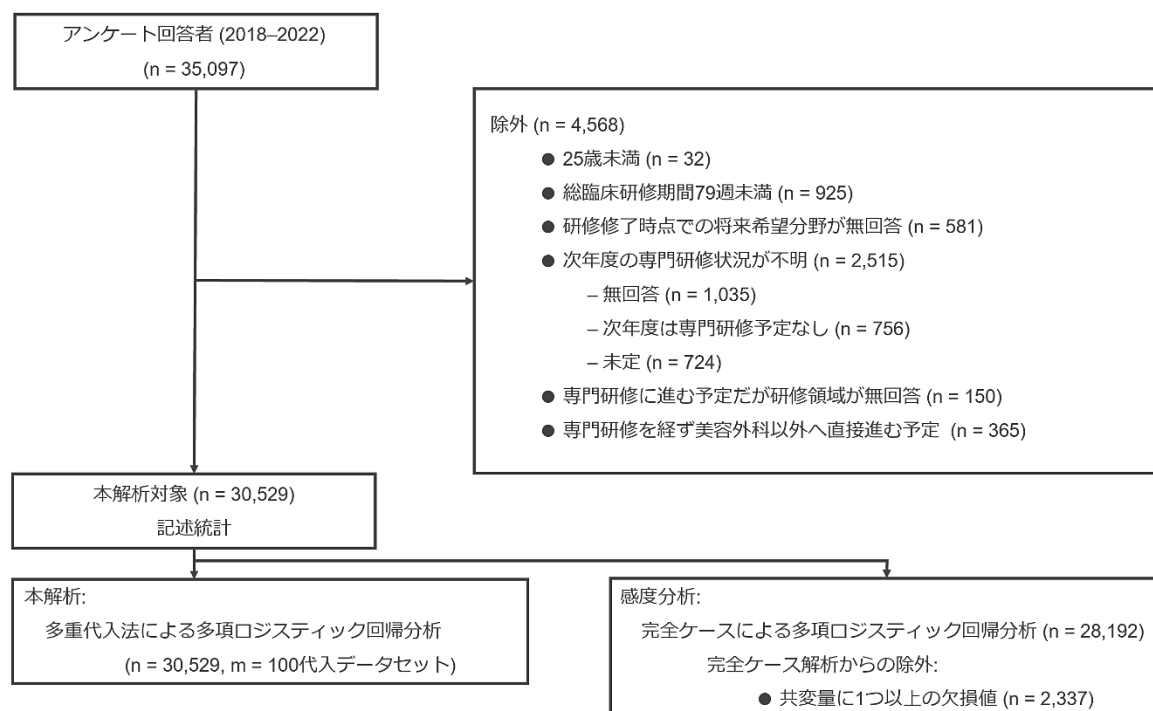


図. 参加者選定フロー

表1. 進路希望群別にみた解析対象者の基本属性

変数	直美 (n = 110)	専門研修後美容外科 (n = 81)	専門研修後美容外科以外 (n = 30,338)	p値	Cramér's V
性別, n (%)				0.13	0.01
男性	80 (72.7)	45 (55.6)	19,214 (63.3)		
女性	28 (25.5)	29 (35.8)	9,979 (32.9)		
欠損	2 (1.8)	7 (8.6)	1,145 (3.8)		
年齢 (歳), 中央値 [四分位範囲]	27 [25-28]	27 [25-27]	27 [25-27]	0.06	—
欠損, n (%)	2 (1.8)	8 (9.9)	988 (3.3)		
卒業大学, n (%)				0.02	0.02
国公立	64 (58.2)	38 (46.9)	18,953 (62.5)		
私立	42 (38.2)	41 (50.6)	11,177 (36.8)		
欠損	4 (3.6)	2 (2.5)	208 (0.7)		
地域枠採用, n (%)				0.01	0.02
あり	2 (1.8)	6 (7.4)	3,407 (11.2)		
なし	105 (95.5)	74 (91.4)	26,322 (86.8)		
欠損	3 (2.7)	1 (1.2)	609 (2.0)		
臨床研修病院, n (%)				0.17	0.01
大学病院	36 (32.7)	37 (45.7)	11,873 (39.1)		
大学病院以外の臨床研修指定病院	71 (64.5)	41 (50.6)	18,166 (59.9)		
欠損	3 (2.7)	3 (3.7)	299 (1.0)		
医学博士号取得希望, n (%)				< 0.001	0.05
あり	4 (3.6)	6 (7.4)	11,072 (36.5)		
なし	106 (96.4)	74 (91.4)	19,168 (63.2)		
欠損	0 (0.0)	1 (1.2)	98 (0.3)		
形成外科/美容外科ローテーション (週), 中央値 [四分位範囲]	4 [0-8]	4 [0-8]	0 [0-0]	<0.001	—
欠損, n (%)	2 (1.8)	8 (9.9)	988 (3.3)		

記述統計および群間比較検定は完全データを用いて実施。n (%)の%は欠損を含む列全体を分母とする。

連続変数はKruskal-Wallis検定, カテゴリ変数はカイ二乗検定 (モンテカルロ法による近似正確率) を使用。

表2. 将来従事希望分野の選択理由

選択理由	直美 (n = 110)	専門研修後美容外科 (n = 81)	専門研修後美容外科以外 (n = 30,338)	p値	Cramér's V
適性・才能があると感じた	47 (42.7%)	18 (22.2%)	6,895 (22.7%)	< 0.001	0.03
やりがいがある	64 (58.2%)	30 (37.0%)	17,117 (56.4%)	0.005	0.02
なんとなく相性が合う	34 (39.0%)	30 (37.0%)	14,793 (48.8%)	< 0.001	0.03
患者・患者家族からの信頼を得やすい	1 (0.9%)	3 (3.7%)	877 (2.9%)	0.45	0.01
給与が良い	58 (52.7%)	37 (45.7%)	1,334 (4.4%)	< 0.001	0.17
労働環境(勤務時間・当直回数等)が良い	26 (23.6%)	19 (23.5%)	3,016 (9.9%)	< 0.001	0.04
学問的に興味がある	22 (20.0%)	26 (32.1%)	14,325 (47.2%)	< 0.001	0.04
優れた指導者がいる	2 (1.8%)	5 (6.2%)	3,296 (10.9%)	0.008	0.02
専門性を維持しやすい	0 (0.0%)	3 (3.7%)	3,595 (11.8%)	< 0.001	0.03
専門医資格がとりやすい	0 (0.0%)	1 (1.2%)	690 (2.3%)	0.26	0.01
先輩や教授に誘われた	4 (3.6%)	4 (4.9%)	1,990 (6.6%)	0.45	0.01
訴訟のリスクが低い	0 (0.0%)	2 (2.5%)	168 (0.6%)	0.12	0.01
親や親戚がその診療科・分野に従事	1 (0.9%)	0 (0.0%)	1,947 (6.4%)	0.008	0.02
独立・開業しやすい	10 (9.1%)	17 (21.0%)	1,450 (4.8%)	< 0.001	0.04
出産・育児・教育の環境が整っている	3 (2.7%)	3 (3.7%)	1,367 (4.5%)	0.69	0.01
医学博士号がとりやすい	0 (0.0%)	0 (0.0%)	116 (0.4%)	1.00	0.01
プライマリケアに関する能力を得られると思ったから	1 (0.9%)	0 (0.0%)	1,157 (3.8%)	0.09	0.01
地域に貢献したいから	1 (0.9%)	1 (1.2%)	1,510 (5.0%)	0.09	0.01
継続したキャリアを積みやすい	4 (3.6%)	3 (3.7%)	1,919 (6.3%)	0.41	0.01
専門領域に将来性がある	6 (5.5%)	1 (1.2%)	733 (2.4%)	0.15	0.01
その他	5 (4.5%)	0 (0.0%)	855 (2.8%)	0.22	0.01

希望理由は1人最大3項目選択可. n (%)の%は列全体を分母とする.

各項目について「選択あり vs 選択なし」と3群でクロス集計し, カイ二乗検定(モンテカルロ法による近似正確確率)を実施した.

21項目の多重比較に対しBenjamini-Hochberg法によるFDR制御($q < 0.05$)を適用した補正p値を記載した.

補足解析 : B-1 群と B-2 群の直接 2 群比較

B 群を形成外科経由(B-1 群, n = 39)と形成外科以外経由(B-2 群, n = 42)に細分化し, 両亜群を直接 2 群比較した基本属性(表 3)および選択理由(表 4)を示す. 基本属性では, 形成外科/美容外科ローテーション期間(中央値:B-1 群 8 週, B-2 群 0 週, $p < 0.001$)を除き, 両亜群間に有意差は認められなかった(性別 $p = 0.24$, 年齢 $p = 0.93$, 卒業大学種別 $p = 0.50$, 地域枠採用 $p = 0.42$, 臨床研修病院種別 $p = 0.50$, 医学博士号取得希望 $p = 0.68$)。

選択理由 21 項目では, FDR 補正後, 両亜群間に有意差を認める項目はなかった. 最大の動機因子である「給与が良い」は B-1 群 48.7%, B-2 群 42.9%と両亜群で実質的に同等であった。

これらの結果は, B-1 群と B-2 群が基本属性および美容外科選択の動機構造において広く類似していることを示し, 両亜群を B 群として統合して主解析を実施した妥当性を支持した。

表3. 将来美容外科希望者の専門研修群別にみた基本属性

変数	形成外科研修後美容外科 (n = 39)	形成外科以外研修後美容外科 (n = 42)	p値	φ係数
性別, n (%)			0.24	0.15
男性	18 (46.2)	27 (64.3)		
女性	16 (41.0)	13 (31.0)		
欠損	5 (12.8)	2 (4.8)		
年齢 (歳), 中央値 [四分位範囲]	27 [25-27]	27 [26-28]	0.93	—
欠損, n (%)	4 (10.3)	4 (9.5)		
卒業大学, n (%)			0.50	0.09
国公立	20 (51.3)	18 (42.9)		
私立	18 (46.2)	23 (54.8)		
欠損	1 (2.6)	1 (2.4)		
地域枠採用, n (%)			0.42	0.11
あり	4 (10.3)	2 (4.8)		
なし	34 (87.2)	40 (95.2)		
欠損	1 (2.6)	0 (0.0)		
臨床研修病院, n (%)			0.50	0.10
大学病院	19 (48.7)	18 (42.9)		
大学病院以外の臨床研修指定病院	17 (43.6)	24 (57.1)		
欠損	3 (7.7)	0 (0.0)		
医学博士号取得希望, n (%)			0.68	0.08
あり	2 (5.1)	4 (9.5)		
なし	36 (92.3)	38 (90.5)		
欠損	1 (2.6)	0 (0.0)		
形成外科/美容外科ローテーション (週), 中央値 [四分位範囲]	8 [1-10]	0 [0-3]	< 0.001	—
欠損, n (%)	4 (10.3)	4 (9.5)		

記述統計および群間比較検定は完全データを用いて実施.

n (%)の%は欠損を含む列全体を分母とする.

連続変数はMann-Whitney U検定, カテゴリ変数はFisherの正確確率検定を使用.

表4. 専門研修群別にみた美容外科の選択理由

選択理由	形成外科研修後美容外科 (n = 39)	形成外科以外研修後美容外科 (n = 42)	p値	φ係数
適性・才能があると感じた	11 (28.2%)	7 (16.7%)	0.81	0.14
やりがいがある	16 (41.0%)	14 (33.3%)	0.93	0.08
なんとなく相性が合う	14 (35.9%)	16 (38.1%)	1.00	0.02
患者・患者家族からの信頼を得やすい	0 (0.0%)	3 (7.1%)	0.81	0.19
給与が良い	19 (48.7%)	18 (42.9%)	0.93	0.06
労働環境 (勤務時間・当直回数等) が良い	5 (12.8%)	14 (33.3%)	0.31	0.24
学問的に興味がある	19 (48.7%)	7 (16.7%)	0.07	0.34
優れた指導者がいる	0 (0.0%)	5 (11.9%)	0.32	0.25
専門性を維持しやすい	1 (2.6%)	2 (4.8%)	1.00	0.06
専門医資格がとりやすい	0 (0.0%)	1 (2.4%)	1.00	0.11
先輩や教授に誘われた	1 (2.6%)	3 (7.1%)	0.93	0.11
訴訟のリスクが低い	0 (0.0%)	2 (4.8%)	0.93	0.15
親や親戚がその診療科・分野に従事	0 (0.0%)	0 (0.0%)	NA	NA
独立・開業しやすい	10 (25.6%)	7 (16.7%)	0.93	0.11
出産・育児・教育の環境が整っている	0 (0.0%)	3 (7.1%)	0.81	0.19
医学博士号がとりやすい	0 (0.0%)	0 (0.0%)	NA	NA
プライマリケアに関する能力を得られると思ったから	0 (0.0%)	0 (0.0%)	NA	NA
地域に貢献したいから	0 (0.0%)	1 (2.4%)	1.00	0.11
継続したキャリアを積みやすい	2 (5.1%)	1 (2.4%)	0.93	0.07
専門領域に将来性がある	0 (0.0%)	1 (2.4%)	1.00	0.11
その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	NA	NA

希望理由は1人最大3項目選択可.

n (%)の%は列全体を分母とする.

各項目について「選択あり vs 選択なし」と2群でクロス集計し, Fisherの正確確率検定を実施した.

21項目の多重比較に対しBenjamini-Hochberg法によるFDR制御 ($q < 0.05$) を適用した補正p値を記載した.

多項ロジスティック回帰分析

C 群を基準とした多重代入法による多項ロジスティック回帰分析の結果を**表 5**に示す。A 群 vs C 群では、学位取得希望(調整オッズ比[aOR] 0.07、95%信頼区間[CI] 0.03-0.18、 $p < 0.001$)、地域枠採用(aOR 0.19、95% CI 0.05-0.76、 $p = 0.02$)、形成外科/美容外科ローテーション期間(週あたり aOR 1.16、95% CI 1.13-1.19、 $p < 0.001$)、給与動機(aOR 21.15、95% CI 14.27-31.34、 $p < 0.001$)が有意に関連した。B 群 vs C 群では、学位取得希望(aOR 0.16、95% CI 0.07-0.37、 $p < 0.001$)、形成外科/美容外科ローテーション期間(週あたり aOR 1.18、95% CI 1.15-1.21、 $p < 0.001$)、給与動機(aOR 17.22、95% CI 10.85-27.35、 $p < 0.001$)が有意であった。地域枠採用は A 群でのみ有意な関連を示し、B 群では非有意であった(aOR 0.82、95% CI 0.35-1.92、 $p = 0.65$)。

感度分析として実施した完全ケース分析の結果(**表 6**)は、本解析結果とほぼ一致していた。両解析で関連方向と効果量の大きさが概ね同等であり、特に A 群 vs C 群対比では全変数において結論に変化はなかった。唯一の例外は B 群 vs C 群対比における卒業大学種別(私立)であり、本解析では非有意(aOR 1.42、 $p = 0.13$)であったが完全ケース分析では有意(aOR 1.67、 $p = 0.04$)であった。卒業大学種別の欠損率は美容外科希望群で高く(A 群 3.6%、B 群 2.5%、C 群 0.7%)、完全ケース分析の結果は選択バイアスの影響を受けた可能性が示唆された。

表5. 美容外科進路選択(3群)を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果(多重代入データ)

変数	直美 (n =)	p値	専門研修後美容外科 (n =)	p値
	調整オッズ比 (95%信頼区間)		調整オッズ比 (95%信頼区間)	
性別				
男性	Reference		Reference	
女性	0.73 (0.46-1.14)	0.17	1.21 (0.74-1.99)	0.44
年齢	1.02 (0.96-1.08)	0.55	0.95 (0.86-1.05)	0.31
卒業大学				
国公立	Reference		Reference	
私立	0.82 (0.55-1.22)	0.33	1.42 (0.90-2.24)	0.13
地域枠採用者	0.19 (0.05-0.76)	0.02	0.82 (0.35-1.92)	0.65
学位取得希望あり	0.07 (0.03-0.18)	< 0.001	0.16 (0.07-0.37)	< 0.001
形成外科/美容外科ローテーション	1.16 (1.13-1.19)	< 0.001	1.18 (1.15-1.21)	< 0.001
希望理由: 給与が良い	21.15 (14.27-31.34)	< 0.001	17.22 (10.85-27.35)	< 0.001

専門研修後に美容外科以外の分野を希望する群を基準カテゴリとした。

100回の多重代入法で生成したデータセットを用い、Rubin's rulesに基づき統合した結果を示す。

表6. 美容外科進路選択(3群)を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果 (完全データ)

変数	直美 (n =)	p値	専門研修後美容外科 (n =)	p値
	調整オッズ比 (95%信頼区間)		調整オッズ比 (95%信頼区間)	
性別				
男性	Reference		Reference	
女性	0.73 (0.46–1.17)	0.19	1.17 (0.70–1.95)	0.54
年齢	1.02 (0.96–1.08)	0.60	0.94 (0.84–1.05)	0.25
卒業大学				
国公立	Reference		Reference	
私立	0.77 (0.50–1.16)	0.21	1.67 (1.02–2.73)	0.04
地域枠採用者	0.19 (0.05–0.77)	0.02	0.95 (0.40–2.22)	0.90
学位取得希望あり	0.08 (0.03–0.21)	< 0.001	0.18 (0.08–0.44)	< 0.001
形成外科/美容外科ローテーション	1.16 (1.12–1.19)	< 0.001	1.18 (1.14–1.22)	< 0.001
希望理由: 給与が良い	23.76 (15.73–35.89)	< 0.001	15.40 (9.33–25.40)	< 0.001

専門研修後に美容外科以外の分野を希望する群を基準カテゴリとした。

欠損値取り扱いの違いによる結果の頑健性を検証するため、感度分析として共変量に欠損値のない完全データセットを用いた。

D. 考察

美容外科希望(A群およびB群)は、給与を動機とすること、学位取得を希望しないこと、形成外科/美容外科ローテーション期間が長いことと関連した。地域枠採用は直美選択を強く抑制したが、専門研修後美容選択への影響は限定的であった。

給与動機の aOR は本研究で検討した全変数中最大であり、A群(aOR 21.15)とB群(aOR 17.22)で同程度に強い関連が認められた。これは、専門研修を経るか否かを問わず、経済的インセンティブが美容外科希望の共通の駆動力として機能していることを示唆する。B群が一定期間の専門研修を経て美容外科に移行する背景には、専門医資格による収益性や信頼獲得を通じた長期的な経済的利益への期待が関与している可能性がある。

学位取得希望は給与に次いで強い関連を示し、「学問的興味」「優れた指導者」「専門性維持」もC群で有意に高かった。これらは、美容外科希望がアカデミックキャリアパスから離れた選択として位置づけられていることを示す。美容外科は大学の主要な研究・教育領域ではなく、自由診療を中心とした民間クリニックでの実践が主流である。

この日本の医療提供体制の特性が背景にあると考えられる。

形成外科/美容外科ローテーション期間が長いほど美容外科希望のオッズが高まる結果は、研修中の臨床経験が希望形成に寄与する可能性を示唆する。ただし、横断研究の性質上、ローテーション経験が希望を醸成したのか、もともと関心がある者が長期ローテーションを希望したのかは区別できない。

地域枠採用は直美選択を強く抑制した(aOR 0.19)が、専門研修後美容選択には有意な影響を示さなかった(aOR 0.82)。地域枠制度は卒業後に指定された地域の医療機関従事を契約上義務付けるため、直接的な美容外科移行は困難である一方、従事義務完了後の美容外科診療は制度的に許容される。この差異は、地域枠採用者において直美が回避されるとしても、より長い経路を経た美容外科希望そのものは維持される可能性を示している。

A群とB群は地域枠以外の主要変数で同様のパターンを示し、補足解析として実施したB-1群とB-2群の直接2群比較でも両亜群の類似性が

認められた。これらは、美容外科を希望する若手医師が経路の差異を問わず共通の動機・属性プロフィールを有する集団であることを示す。直美と専門研修後美容を分ける要因は、本研究で測定された変数ではなく、専門研修制度に対する個人的価値観、即時の経済的必要性、家族・社会的環境等にある可能性がある。

本研究には以下の限界がある。第一に、横断研究であり因果関係は示せない。第二に、アウトカムは進路希望であり実際のキャリア選択ではない。第三に、美容外科希望群のサンプルサイズが限定的であり、特に B-1 群と B-2 群の比較では検出力が制限される。両亜群を直接比較した補足解析で有意差を認めなかった項目についても、サンプルサイズの制約により真の差異を検出できなかった可能性は否定できない。第四に、卒業大学種別の欠損率が美容外科希望群で高かった。感度分析(完全ケース分析)で同変数の B 群 vs C 群対比のみ本解析と乖離した結果は、選択バイアスの影響を受けた可能性がある。第五に、家庭の経済状況、ロールモデル、自由診療市場の地域差等、本研究で測定されなかった重要な要因が存在する可能性がある。

E. 結論

本研究では、臨床研修修了時点での将来の美容外科希望が、給与動機、学位取得希望の低さ、形成外科/美容外科ローテーション期間の長さに関連することを示した。これらの関連は直美と専門研修後美容で共通しており、両経路を選択する者は共通の動機・属性プロフィールを有することが示唆された。一方、地域枠採用の効果は経路により異なっていた。今後は、追跡調査による進路希望と実際の選択との一致度の検証、および本研究で測定されなかった社会経済学的要因の探索が課題である。

F. 研究発表

該当なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし